

編集後記

<八尾 恒良>

早期胃癌研究会でいつも思うのだが、X線、内視鏡診断で大事なことは、描出された所見を正しく拾い上げることにあると思う。そして、拾い上げた所見やその解釈が正しいかどうかを知るために切除標本肉眼所見があり、病理学的検索がなされているはずである。このような態度を放棄し、診断が当たった、当たらないという点のみに拘泥すれば“診断学”とは言えず、また進歩も望めないであろう。

本号では“ルーチン検査”が論議されているが、特集号に寄稿される程の施設でも“見逃し”に対する考え方や診断された癌の質にばらつきが大きすぎるように思う。今更という気がしないでもないが、もう一度ルーチン検査や、拾い上げ診断のあり方が論議されるべきかも知れない。

また、千差万別とはいえ、Ⅱbや微小胃癌に限らず、胃癌の癌としての診断根拠がもう少し明らかにされるべきであろう。

と同時に、X線や内視鏡診断学は、本質的には光顕や電顕同様、数字や統計以前に、写真の質で勝負すべき学問であるということを忘れてはなるまい。

<編集> 早期胃癌研究会